コーカサスの禿鷹

豊島与志雄

青空文庫

一

コーカサスに、一匹の大きな禿鷹がいました。仲間の者達と一緒に、高い山の頂に住んで、小鳥を取って食べたり、麓の方へ下りてきて、死んだ獣の肉をあさったりしていましたが、ある時ふと、ひょんな考えを起こしました。

「自分は仲間の誰よりも、体が大きく、力が強く、知恵もあるので、みんなから尊敬されている。そこで一つ奮発して、みんなよりも立派な住居をこしらえて、王様然と構えこんでいなくちゃなるまい」

そして彼はいろいろ考えた末、国中の一番高い山の頂に、立派な岩屋を探して、そこに住居を定めようとしました。

ところがいよいよとなると、どれが国中で一番高い山か、さらに見当がつきませんでした。一番高そうな山の上に立って、四方を見渡しますと、向こうの山の方がもっと高そうに思われますし、その山の上へ飛んでゆくと、また向こうにもっと高そうな山が見えます。そしてあちらこちらと、山から山へ飛び移ってるうちに、体が疲れてくるし、気持ちはいらいらしてくるし、どれが一番高い山だかさっぱりわからなくなりました。

「こんなじゃとてもわかりっこない。誰かに聞かなくちゃ駄目だ。そこで、禿鷹のことなら俺

達禿鷹が一番よく知ってるし、山のことなら山自身が一番よく知ってるはずだから……」

そう思いついて彼は、ある山のうえに飛んでいって、大きな岩の上にとまって、山の霊にたずねてみました。

「もしもし、ちょっとおたずねしますが、国中で一番高い山はどの山でしょうか」

すると、岩の中の方から大きな声がしました。

「俺だ」

禿鷹はびっくりしました。これが国中で一番高い山だったのかしら、と思ってあたりを見渡しますと、どうも向こうの山の方が高そうな気がします。それでなおも一つの山の霊に聞いてみたくなって、向こうの山へ飛んでゆきました。

「もしもし、国中で一番高い山はどの山でしょうか」

すると、その山の霊が岩の中から答えました。

「俺だ」

禿鷹はまたびっくりしました。そして、も一つ他の山にたずねてみようと思って、その方へ飛んでゆきました。

「もしもし、国中で一番高い山はどの山でしょうか」

「俺だ」

そこで禿鷹はなお迷いました。そして方々の山へ行ってはたずねましたが、どの山もみな国

中で一番高いのは俺だというのです。

さあ禿鷹は困ってしまいました。山自身に聞いてもわからないとすれば……。その時ふと彼は、山の神のことを思いつきました。国中の山の霊を支配してる山の神に聞けば、きっとわかるにちがいない。「だが……まてよ」と禿鷹は考えました。「国中で一番高い山に巣を作りたいなどと、明らさまに言えば、山の神は俺を生意気だと思って、教えてくれないかも知れない。これは一つだまかして聞く方がよさそうだ」

彼は一人うなずいてから、山間の森の中に山の神を訪れました。

「いつも御機嫌よろしゅうて、結構でございます」

禿鷹が丁寧に御辞儀をするのに、山の神は大様にうなずいてみせました。

「うむ　そしてお前のような者がわしの所へ来たのは、何の用か」

「はい、私共は山の上に住んでおりますので、山については何一つ知らないことはありません。がただ一つ、国中でどれが一番高い山だか、それがわからないで困っております。私共にとっては、山は言わば自分の家でありまして、国中で一番高い山は、自分の家の一番貴い所でありますから、汚さないように大事にしたいと思っておりますが、さてどれが一番高い山だかわからないのです。山の霊に聞いたらわかるかと思って、一々たずねて廻りましたが、どの山の霊もひどくいばりやで、みんな自分が一番高い山だと申します。それで……」

「ああそのことで来たのか」と山の神は言いました。「山の霊達はみなそんなにいばっている

のか。よろしい、わしがよく言いきかしておいてやる」
「はい、どうぞお願いいたします。そして……」
「いやもうよい。山の霊達にはすぐわしが言いきかしてやるから」
禿鷹（はげたか）は初め、山の神から一番高い山を聞き出すつもりでしたが、話がそんなふうになって、とうとう聞きそびれてしまいました。けれども、山の霊達がいばりさえしなければ、山の霊達から聞き出せるにちがいない、と禿鷹は考えて帰ってゆきました。

二

翌日になると、禿鷹は高い山の上へ飛んでいって、その山の霊にたずねました。
「もしもし、国中で一番高い山はどれですか」
岩の中から山の霊が答えました。
「向こうのだ」
禿鷹は向こうの山に飛んでゆきました。
「もしもし、国中で一番高い山はどれですか」
「向こうのだ」
禿鷹は向こうの山に飛んでゆきました。しかしその山の霊も一番高い山は向こうのだと答え

ます。そんなふうにして、禿鷹はまた方々飛び廻りましたが、どれ一つ自分が一番高いと言う山はありませんでした。

「これは困った。山の神に言われたとみえて、どの山もへりくだってばかりいて、向こうのだ。向こうのだ……と言うんじゃあ、いくら聞いてもわかりっこない。そうだ、も一度山の神の所に行ってみよう」

そこで禿鷹は、山の神の所へ飛んで行きました。

「昨日はありがとうございました。おかげで山の霊達は少しもいばらなくなりました。けれど困ったことには、みんなへりくだってばかりいて、どれが一番高い山ですかと聞いても、向こうのだ、向こうのだと答えるきりです。それでどうか、も一度お骨折り下すって、いばりもしなければへりくだりもしないように、よく言いきかして下さいませんでしょうか。そうでなければ、どれが一番高い山だか、私共は聞き出すことが出来ませんから」

「よろしい」と山の神は言いました。「お前の言う通りに言いきかしておいてやろう。どの山が一番高いか、わしから教えてやってもよいが、今まで山の霊達にたずねたのだから、やはり山の霊達に聞くがよい。山の霊達には、お前の望み通りわしが言いきかしておいてやる」

「どうぞお願いします」

そして禿鷹は喜んで帰ってゆきました。

三

さて翌日になると禿鷹は、こんどこそは大丈夫だと思って、威勢よく、飛んでゆきました。

「もしもし、国中で一番高い山はどれですか」

するとその山の霊は、いばりもしなければへりくだりもしないで、岩の中から冷かに答えました。

「どれだか知らない」

禿鷹は当がはずれました。それでもなお、方々の山へ行って、一々たずねてみましたがどの山の霊もみな、どれだか知らない、と同じ冷かな答えをするきりです。

そうなると禿鷹も、山の霊達から聞き出すことはあきらめるほかはありません。それかって、山の神へまた何とか頼みに行くのもしゃくです。はて何かよい工夫はあるまいかと、一晩中考えた末、思いついたのは雷の神のことでした。

「雷の神なら一番高い山を知っているはずだ。がただ聞いたんでは、俺の受持ちじゃないと言って教えてくれないかも知れない。これは一つ、雷の神の気短かなのにつけこんで、工夫をめぐらすに限る」

四

禿鷹は翌日、思案を定めて、雷の神の岩屋へやって行きました。

「今日はよいお天気のようですが、お休みになるのですか」

「そんなことを聞いてどうするのだ」と雷の神は破鐘のような声で言いました。

「いえ、どうもいたしませんが　いつもあなたが低い所でばかり雷を鳴らしていらっしゃるので、お疲れになったのじゃないかとおもいまして、へへへ」と禿鷹は変な笑い方をしました。

「何だ、低い所でばかり雷を鳴らしてるから疲れる……」

「私共から見ますと、あなたが低い平地の上にばかり雷を鳴らしていらっしゃるのが、意気地ないような、おかしいような気がします　私共のような鳥でさえ、高い山の上を飛び廻ってるのですもの、あなたも一つ奮発して、国中で一番高い山の上に雷を落としてみられたら、いかがなものでしょう。それともあなたは、そんなに高い所へは昇れないとおっしゃるのですか」

気の短い雷の神は、それを聞いてもうむかっ腹を立てて、いきなり立ち上がりました。

「よし、それではこれから、国中で一番高い山の上に、大空の上から雷を落としてみせるぞ」

「それは結構でございますな。謹んで拝見いたしましょう」

雷の神がうまく策略にのったので、禿鷹はしめたと思って微笑みました。雷が落ちるのを見定めれば、どれが一番高い山だかすぐにわかるし、またそれで、今まで嘘をついた山の霊を、罰するわけにもなるのです。

五

そこで禿鷹は、ある高い山の上に飛び上がって、その頂の岩の影から、四方を隈なくうかがい始めました。

谷間から遠く低く平地へかけて、ぼーっともやがかかっていまして、その間から方々に、高い山の頂がそびえ立って、きらきらと日に照らされています。

するうちに、いつのまにか、日の光が隠れてしまって、今まで低い麓の方にしか出たことのないまっ黒な夕立雲が、驚くほど高く空の上に出てきて、むくむくとふくれ広がってきました。

「雷の神がいよいよやり始めたな」

そう思って禿鷹は、眼を皿のように見開いてうかがっていました。

夕立雲はますます大きく濃くなって、見る見る内に空を隠してゆき大粒の雨がぽつりぽつり落ちてきて、天地がまっ暗な闇に包まれてしまいました。

「さあもうじきだぞ」

そして禿鷹はさらに眼を見張りましたが　岩の影からではよく見えないので、その山の頂の一番高い岩の上に飛び上がって、雨に濡れながら一生懸命になって、どこに雷が落ちるかを見張りました。

雨はもう大降りになり、天地はなお一層暗くものすごくなり、高い雲の中には雷が鳴り始めました。と思うまに、ぴかっと矢のような光がつっ走って　同時に天地もくずるるばかりの音がして……とまでは覚えていましたが、それきり禿鷹はあっというまもなく、息が絶えてしまいました。

禿鷹が上っていた山こそ国中で一番高い山で、そこに雷の神が雷を落としたものですから、頂上の岩の上にいた禿鷹は、それに打たれて、黒焦げになって死んでしまったのです。

青空文庫情報

底本：「豊島与志雄童話集」海鳥社
1990（平成2）年11月27日第1刷発行
入力：kompass
校正：門田裕志、小林繁雄
2006年4月28日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

コーカサスの禿鷹

豊島与志雄

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/